

平成22年度資源評価票(ダイジェスト版)

イカナゴ類

イカナゴ *Ammodytes personatus*

キタイカナゴ *A. hexapterus*

系群名 宗谷海峡

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命: 6歳以上

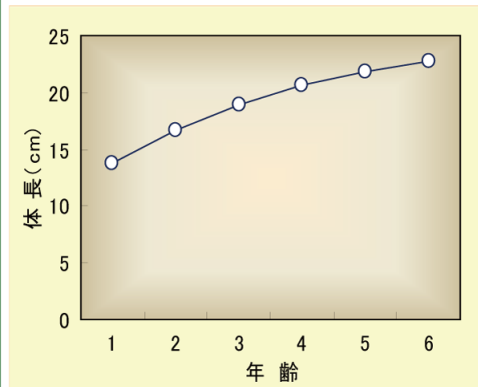
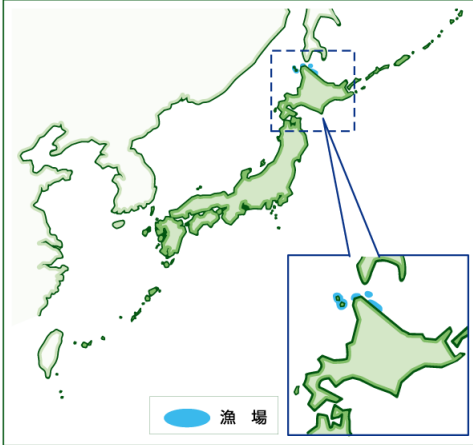
成熟開始年齢: 2歳

産卵期・産卵場: イカナゴは春季(3月下旬～5月上旬)で、稚内、枝幸および利尻・礼文周辺の沿岸域、キタイカナゴが初冬(11月下旬～12月)で、サハリン周辺の沿岸域

索餌期・索餌場: 主に宗谷海峡周辺の水深40～80mで、底質が砂礫の海域

食性: 未成魚はカイアシ類などの浮遊性甲殻類や珪藻類、成魚はカイアシ類、端脚類、オキアミ類、十脚類、ヤムシ類、魚類など

捕食者: マダラなどの大型魚類、海鳥類、海産哺乳類

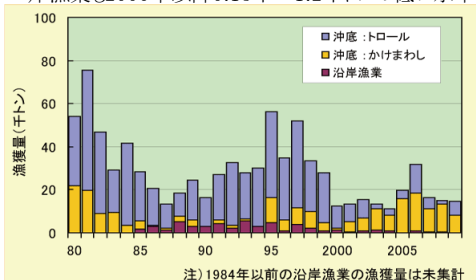


漁業の特徴

宗谷海峡周辺海域に分布するイカナゴ類にはイカナゴとキタイカナゴの2種が含まれているが、近年では漁獲物におけるキタイカナゴの混入率は減少傾向にある。漁獲物ではこれら2種が区別されていない。漁獲物のほとんどは、沖合底びき網(沖底)によって漁獲されている。沖底は6～9月に1～6歳魚を漁獲し、沿岸漁業では4～7月を中心に0～3歳魚を漁獲している。

漁獲の動向

沖底の漁獲量は、1988年以降増加傾向を示し、1995年に52千トンに達した。その後は減少傾向に転じ、2000年代に入ってから10千～20千トンの低い水準で推移していた。2009年の漁獲量は前年と同程度の14千トンであった。沿岸漁業も2000年以降0.15千～1.2千トンの低い水準で、2009年も前年と同程度の0.21千トンであった。



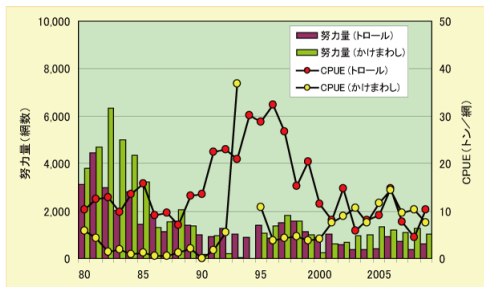
資源評価法

資源回復対象種となって資源回復措置がとられているため、主要漁業である沖底の漁獲量は資源水準を反映していない。そのため、トロールの努力量が比較的安定していた1986年以降のCPUEを用いて近年の資源水準の評価を行った。ただし、資源が日本水域とロシア水域とにまたがって分布していることと、漁業実態が変化しているため、CPUEによる長期的な資源水準の比較には不確実性が高い。

資源状態

トロールのCPUEは1990年代に入り増加傾向を示し、1996年には1980年以降最高の32.3トン/網に達した。1997年以降は減少傾向に転じ、2008年には4.5トン/網と1980年以降最低値となったが、2009年にはやや回復し10.3トン/網となった。1986～2008年のCPUEの平均を50とすると、2009年の水準指数は33であった。トロールCPUEとかげまわしCPUEともに近年5カ年は横ばいであった。以上のことから、資源水準は中位、動向は横ばいとした。また、漁獲物の体長組成からみて、2007年級群の加入は良好であったと考えられる。しかし、今後の資源動向は若齢魚の加入次第である。





管理方策

イカナゴ類の資源水準が中～低位に留まっているのは、豊度の高い年級群が加入していないことが要因と考えられる。2004年から資源回復計画の対象種となり、稚内のトロール船2隻が減船され、2008年のオッタートロールの漁獲努力量は1980年以降最低となったが、2009年にはやや回復した。また、かけまわしの努力量は、2003年以降、1,000網前後で推移している。現在の漁獲努力量は1980年代に比較すると低く、現状程度であれば資源を急激に悪化させる状況ではないと考えられる。しかし北海道の資源回復計画の目標から、若齢魚や産卵親魚保護のための漁獲努力量削減対策をさらに講じる必要がある。

資源評価のまとめ

- 漁業構造の変化があり、近年の沖底のCPUEが資源全体の水準を反映しているかは不明
- 1986年以降のトロールCPUEの動向を中心に判断して資源水準は中位
- 資源動向は若齢魚の加入状況いかにであるが、トロールCPUEとかけまわしCPUEともに近年5カ年は横ばいであることから、資源動向は横ばい

管理方策のまとめ

- 北海道では、2004年からイカナゴを資源回復計画の対象種とした
- 資源回復計画の目標から、若齢魚や産卵親魚保護のための漁獲努力量削減対策をさらに講じる必要あり

執筆者: 福若雅章

資源評価は毎年更新されます。